

学位論文要旨

視覚障害のある芸術家の
アイデンティティ発達に関する研究

—— 絵画表現を行う芸術家の事例研究 ——

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 心理学分野
D175569 奥田 博子

目 次

序 章 病に見舞われることや障害を負うこと

——パラドキシカルな文脈の中で生きる——

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 視覚障害のある芸術家のアイデンティティに関する研究の
動向と展望

第 2 節 事例研究における個人史研究の動向とライフストーリー分
析の臨床的意義

第 3 節 本研究の目的

第 2 章 事例研究

第 1 節 先天性視覚障害があり早期失明した芸術家のライフストーリ
ー研究（光島貴之）（研究 1）

第 2 節 中年期中途失明の芸術家のライフストーリー研究
（エム ナマエ）（研究 2）

第 3 節 事例の比較分析

第 3 章 本研究の成果と今後の課題

第 1 節 本研究の成果

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

引用文献

序章 病に見舞われることや障害を負うこと

——パラドキシカルな文脈の中で生きる——

人間は人生の中で多くの困難を経験するが、それを乗り越え、学び成長していく可能性を有している。人生において、その困難さを乗り越え、さらに発達するか、退行・停滞するかの二者択一の時を、Erikson(1950)は、「危機」と呼んだ。病に見舞われたり、障害を負ったりする時、我々の多くは「危機」に直面する。その時、矛盾した願望を抱いたり、両極的な思考をしたりするなど、数多くのパラドキシカルな心理的事象が存在し、成長の方向に導く選択が困難で、かなわぬこともある。このようなパラドキシカルな文脈における危機を乗り越え、成長していくプロセスの探求は、アイデンティティ研究の重要な課題である。

第1章 本研究の背景と目的

第1節 視覚障害のある芸術家のアイデンティティに関する研究の動向と展望

視覚障害は先天性と後天性があり、全盲と弱視、視野障害に大別される。アイデンティティは「自分とは何者か」の問いで、Erikson(1950)によって青年期の心理社会的課題として概念化されたが、生涯にわたって発達していく。岡本(2007, 2010)によれば、重い病気や障害、愛する人に死なれることなどは、アイデンティティの亀裂や喪失、崩壊の契機となることも少なくない。視覚障害に見舞われると、視覚の喪失のみならず、様々な心理的問題やアイデンティティの危機に直面する場合も多い。

鑪(2008)は、芸術家は無意識の欲望や欲動を社会に受け入れられる形で表現しようとしていると述べている。山本(1995)は、その表現からアイデンティティの達成プロセスなどの流れを分析・考察する可能性を示した。筆者は、芸術作品とその表現には、芸術家としてのアイデンティテ

ィが表れると考える。小嶋（2010）は、脊髄損傷者を対象にした研究で、新たな障害者としてのアイデンティティの再形成の重要性を指摘している。しかし視覚障害者の心理に関する先行研究において、芸術家アイデンティティの発達のプロセスについては十分に明らかにされていない。そこで本研究では、絵画表現を行う視覚障害のある芸術家が、病や障害による内的世界の危機に対峙しながら周囲との関係性の中で芸術家アイデンティティを発達させていくプロセスを縦断的かつ実証的に研究する。

第2節 事例研究における個人史研究の動向とライフヒストリー分析の臨床的意義

ライフヒストリーとは、「個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録」（谷，1996）である。本研究では、個人史研究の視点を取り入れながら、佐藤（2008）の質的データ分析の理論と方法をもとに、視覚障害のある芸術家のライフヒストリー分析を行う。

本研究で提示する事例は、全盲の60代と70代（2019年3月逝去）の男性芸術家2名である。両名とも医学的に完全失明した時期が明確で、中年期に全盲の芸術家として独自の絵画表現を確立している。また、多種多様な資料収集と分析によるトライアングレーション（方法論的複眼，佐藤，2008）を行い、信頼性と妥当性の評価と、視覚障害と芸術家としてのアイデンティティ発達との関連性を比較検討することも可能である。

第3節 本研究の目的

本研究では、視覚障害のある芸術家のライフヒストリーに焦点を当て、心理的プロセスから捉えられる芸術家アイデンティティ形成の文脈、危機の特質とアイデンティティの発達・成熟の様相とプロセスを明らかにすることを目的とする。

第2章 事例研究

第1節 先天性視覚障害があり早期失明した芸術家のライフストーリー 研究（光島貴之）（研究1）

1. 問題と目的

先天性の視覚障害で児童期に失明し、中年期になって芸術家としての人生を歩むライフストーリーに焦点を当て、芸術家アイデンティティの危機と発達のプロセスを明らかにすることを目的とする。研究1-1では、心理的体験からみるライフストーリーを描き出し、研究1-2では、視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティ発達のプロセスを検討する。

2. 方法

研究対象 光島貴之（本名） 1954年生まれ。先天性の弱視。10歳頃、両眼を失明。京都市内で鍼灸師として治療院を営む傍ら創作活動に励む。

資料の収集と手続き 心理的年譜と調査ガイドを作成し、2002年から2018年2月まで芸術家本人への面接やメールでのインタビューを実施した。メディアやイベントでのトーク、展覧会やワークショップでの取材、本人の表現による公式サイトブログや大学での講義資料等の二次資料も合わせて収集した。その資料を元にライフストーリーを再構成した後、時系列に整理し、カテゴリー分析を行った。また、本研究は、光島貴之氏との17年間にわたるインタビューや対話を通して、妥当性の確認を行ってきた。その過程を通して、光島氏の積極的な研究協力への同意を得ている。論文の公表及び論文中の作品画像の使用とその表示の方法については、文書にて確認と承諾を得た。なお本研究は、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

調査内容 ライフストーリーに沿って、心理的事象を時系列のまとまりに区分した。また、5つの視点（①視覚障害や「見えないこと」・「見え

ない世界」・「見えない文化」に関する事及び障害者問題, ②「見えないこと」の価値の転換と晴眼者との関係性, ③周囲の他者との関係性, ④触覚の世界と表現, ⑤芸術家アイデンティティ) より調査した。

分析方法 収集した資料データから意味や文脈を理解した上で文章単位で抽出し(文書セグメント化), 5つの視点から区分された時期にそれぞれ分類した。その後, 内容別に要約し, 類似したものをグルーピングしてカテゴリー化を行なった。得られたカテゴリーを下位カテゴリーとし, 更に, 意味が近いと考えられる下位カテゴリーに対してグルーピングを行い, 上位カテゴリーに集約した(「」は文中における強調及び対象者の語りや表現における引用, 『』は作品等の著作物を示した)。

3. 結果と考察

(3-1) 早期失明が他者との関係性と芸術家のアイデンティティ形成に与えた心理的影響 (研究 1-1)

光島貴之のライフヒストリーと考察 光島貴之は, 常に「見えないこと」で劣等感を抱いていた。38歳の時, 粘土造形を始める。その後, ラインテープを用いたドローイング「触覚絵画」(Figure 1-1), 「触覚コラージュ」, 触覚を駆使して鑑賞するインスタレーション的作品等を発表したり, 触る作品を素材として生かしたワークショップを開催したりして「触覚の世界」を表現する芸術家としての存在を示し, その道を歩んできた。

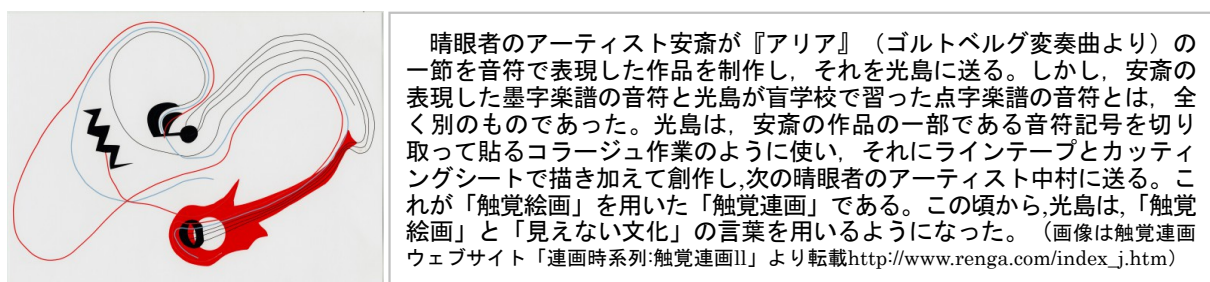


Figure 1-1. 『弦楽器』(「触覚連画」, 1999) Copyright©TAKAYUKI MITSUSHIMA

光島は、視覚以外の感覚を駆使して事象を感受し表現しようとする営みを「見えない文化」とし、晴眼者の「見る文化」との違いを絵画表現により明確化した。これによって「見えないこと」へ直面化せざるを得なくなり、更なる葛藤が生じ、心理的危機に陥る。しかし、脳梗塞による「身体崩壊感覚」や「触覚絵画」表現によって自己洞察が促進された。そして、視覚中心の「見る文化」に根ざした晴眼の人々との新たな関係性が創造され、芸術家アイデンティティが形成されたことが示唆された。

(3-2) 触覚の世界を表現し続ける視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達とそのプロセス (研究 1-2)

1) ライフヒストリーにおける視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達に関する7区分の時期と心理的プロセスにおける各段階での様相

分析の結果、語りの文書セグメント 208 個と表現の文書セグメント 24 個による総数 232 個から、53 個の下位カテゴリーに分類され、最終的に、26 個の上位カテゴリーに集約された。これらを視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティ発達の様相を示す心理的プロセスの段階を構成する状態像とし、Figure 1-2 に示した。

幼児期や児童期における見えにくさの育ちの時期：絵画に憧れ傾倒しつつも、「見えにくさ」で劣等感を抱き、盲学校社会の中で生育した。

青年期の内的世界における「見えないこと」への探求の時期：大学の哲学や教育活動、障害者運動に「見えないこと」を探求した。

中年期における「見えないこと」への対峙と表現の始まりの時期：ネガティブに捉えていた「見えない世界」で培った触覚の良さに気づいた。そして、視覚を用いず、触覚で捉えた三次元世界をパラドックス的な二次元世界の絵画表現で、「晴眼の世界」へと広げていこうとした。

中年期における自己表現への取り組みと自己洞察の時期：全盲である

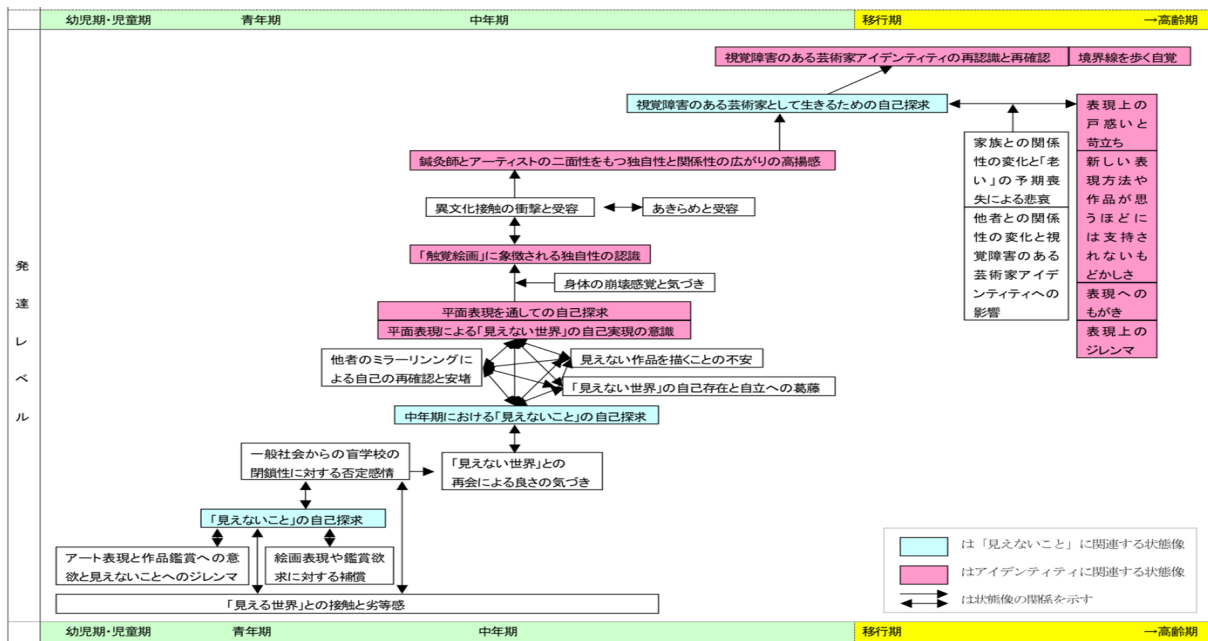


Figure 1-2. 先天性視覚障害があり早期失明した芸術家のアイデンティティ発達のプロセス（光島貴之）

芸術家が絵画表現していくことは、「見えないこと」に、より直面化する。不安と葛藤の中で表現を続けられたのは、周囲の人々からの作品を見て、見たままを鏡のように言葉で映し出す声の「ミラーリング」であった。

中年期後半の「触覚絵画」制作と「見えない文化」を担い多忙を極める時期：心身の疲労から、脳梗塞で倒れる。しかし、リハビリや脳梗塞の体験を作品にするなどの一連の経験は、触覚を取り戻すための必死の「努力」を生成させ、芸術家としてのアイデンティティ発達に大きく影響した。

中年期から高齢期への移行期における芸術家としての移行期：芸術家の成熟とは、ライフサイクルの危機の感覚が創造性に働きかけ、更に表現上のジレンマや初心に気づくことによって「表現の振り幅」、転じて「表現の余裕」が生まれることであった。

高齢期に移行しつつ「見えない世界」と「見える世界」との境界線の上を歩くという自覚を持つ時期：芸術家として、視覚障害と晴眼の社会や文化の境界線の上に立ち、両極に傾きながら芸術家として歩いていく意識をもち、視覚障害のある芸術家アイデンティティを発達させた。

2) 視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達のプロセス

光島は、「視覚障害の世界」と「晴眼の世界」の双方の世界に常に接触しながら育ち、生きてきたと推察される。自己の内的本質部分である「触覚の世界」の危機の感覚や自己存在の有限性を自覚するとき、彼の芸術家アイデンティティが明確になった。多くの人を経験するようなライフサイクル上での経験と、その上に光島の視覚障害のある芸術家のライフサイクルでの経験が展開されるという二重構造である。双方での心理的危機が芸術家アイデンティティの発達に影響を与えていた。

第2節 中年期中途失明の芸術家のライフヒストリー研究

(エム ナマエ) (研究2)

1. 問題と目的

中年期に失明した画家が、絵を描かないで4年間を過した後、全盲の画家として復活するライフストーリーに焦点を当て、そのアイデンティティ危機と発達のプロセスを明らかにしていくことを目的とする。研究2-1では、ライフヒストリーを描き出し、研究2-2では、視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティ発達のプロセスを検討する。

2. 方法

研究対象 エム ナマエ (ペンネーム) 1948年生まれ。2019年3月6日心不全にて逝去。享年70歳。妻と二人暮らしであった。また、盲導犬アリーナと暮らしていた。

資料の収集と手続き 2002年から2018年12月まで研究1と同様に資料収集を行い、エム ナマエ氏の積極的な研究協力への同意を得ている。論文の公表及び論文中の作品画像の使用とその表示の方法については、文書にて確認と承諾を得た。なお本研究は、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

調査内容 研究1と同様に、区分された時期と5つの視点(①糖尿病による失明,②経験の価値の転換と社会との関わり,③周囲の他者との関係性,④全盲の画家としての独自性と絵画表現活動,⑤自己の生き方と芸術家アイデンティティ)より調査した。

分析方法 研究1-2と同様。

3. 結果と考察

(3-1) 画家の中途失明が芸術家のアイデンティティ形成と他者との関係性に与えた心理的影響(研究2-1)

エム ナマエのライフヒストリーと考察 大学生の時にプロのイラストレーターとしてデビューし活躍していたが,38歳の時に糖尿病で完全失明。人工透析を受けながら,童話作家としての道を歩み始め,4年間絵を描かないで過ごしたのち,全盲の画家として復活する。彼は,失明を画家の象徴的な「死」とし,自ら命の有限性に向き合う。妻となる同伴者と共に人生の旅を続けようとする希望の創出と関係性が,自己の成長を促した。また,見えない目で描いた作品が彼の妻や周囲の人々の声の「鏡」によって映し出されることで作品イメージが捉えられ,再び絵に表現していく。この感受と表現の相互作用を繰り返しながら人の営みの中で独自の絵画(Figure 2-1)が完成されるプロセスを通して視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティが形成されたと考えられる。



絵のモチーフとして妻のコボちゃんや盲導犬も多く登場する。彼はイラストボードに肉厚のボールペンで自ら下絵を納得するまで一人で描き,彩色の段階になったら,コボちゃんに彩色したい色を自分の手に持たせてもらうように依頼する。彼の指定するパステルの色を手持たせてもらうサポートを得,彼自身がパステルで彩色して絵画制作を行った。

(画像はエムナマエ公式サイトより転載)

Figure 2-1. 失明後の作品『素敵な夜-SWEET NIGHT-』(1997) Copyright©Emu Namae

(3-2) 失明後の人生を生き抜く視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達とそのプロセス (研究 2-2)

1) ライフヒストリーにおける視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達に関する7区分の時期と心理的プロセスにおける各段階での様相分析の結果、語りの文書セグメント 234 個と表現の文書セグメント 47 個による総数 281 個から、52 個の下位カテゴリーに分類され、最終的に、29 個の上位カテゴリーに集約された。この 29 個の上位カテゴリーを視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティ発達の様相を示す心理的プロセスの各段階を構成する状態像とし、Figure 2-2 に示した。

幼児期や児童期における人間形成の時期：愛する祖母から聞かされたお伽話等がきっかけで死の予期による衝撃と悲哀を経験した。また、祖母を喜ばせたい一心で絵を描き、喜んでくれることで自分も幸せに感じた。

青年期における画家としての出発と人生の旅を意識する時期：「見ることに命をかけていた」と語る画家となった。国内外を旅する時は、宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』の本を携えて愛読し、彼の死生観は深められた。

中年期における糖尿病による画家の失明宣告の時期：「精神内界で生起する喪失感や失意」(山本, 2014) を象徴する「失明＝画家の死」を絵画作品に投影した。画家である自己の「死」を弔うプロセスが始まった。

絵を描かないで過ごした「空白の4年間」の中で生き抜く時期：余命宣告の現実的な「死」に直面する中、「表現者であること」を貫き通すために、童話作品を書く必死の取り組みをする覚悟と努力の時期である。

中年期後半の全盲の画家として妻と盲導犬との生活をする時期：見えない自分が絵を描くことで、妻を喜ばせることができるというパラドクサ的な価値の転換が行われた。そして、妻と盲導犬に心身を支えられながら全盲の画家としての独自の表現を確立していくプロセスが始まった。

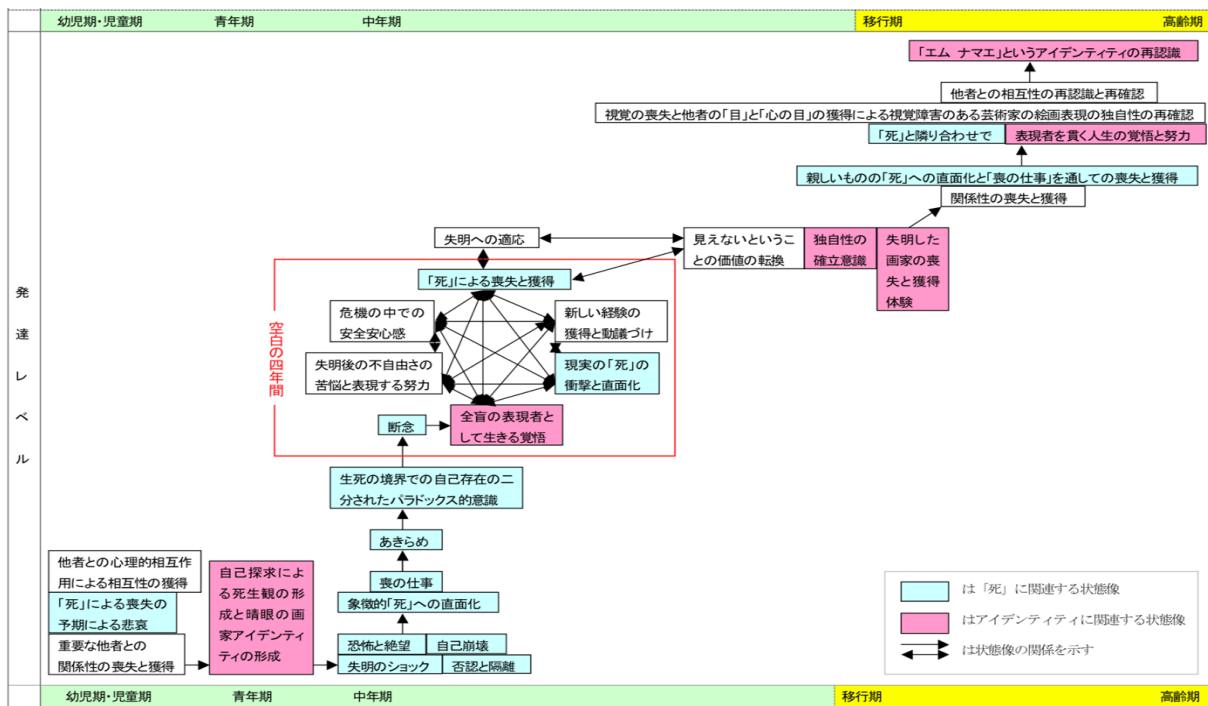


Figure 2-2. 中年期中途失明の芸術家のアイデンティティ発達のプロセス（エム ナマエ）

高齢期への移行期における親しいものとの死別経験が始まる時期：糖尿病による合併症の進行とともに、最も心身への衝撃を与えたのは、盲導犬アリーナの引退と死であった。展覧会に向けてアリーナの絵を再び描けるようになり、喪失体験は、「補償の様態」（山本，1997）に変化した。

「エム ナマエ」を生きる高齢期：失明し、物事を周りにゆだねることが多くなったが、「絵を描くことで相手が喜んでくれるのが自分の幸福であると感じる芸術家」と彼のアイデンティティを定義できた時期である。

2) 視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達のプロセス

彼の生涯を概観すると、7区分の全ての時期において象徴的な「死」や現実的な「死」の観念がエッセイ等の言語表現や絵画作品に現れ、心理的影響を与えている。また、その心理的影響が、芸術家アイデンティティの発達に深く関わっていた。糖尿病による失明は、象徴的な「死」と現実の「死」へ直面化せざるを得ない状況を生じさせ、晴眼の画家としてのアイデンティティの崩壊を招いた。この体験から、表現者として生き抜くとい

うアイデンティティが明確化され、彼は極限での「努力」を遂行した。彼は「人にゆだねる人生」となっても生涯を通じて変わらなかったのは、絵を描くことで、人を喜ばせることであった。

第3節 事例の比較分析

視覚障害のある芸術家2名の語りと表現の各々の分析を元に比較分析を行った。以下の点で本質的に類似している点が見られた。

①「人生のテーマ」を自己探求や自己存在を支える観念と定義すると、光島にとって人生のテーマは「見えないこと」であり、エム ナマエにとっては「死」であった。幼児期・児童期からその後の人生を通してこれらのテーマが繰り返し現れている。②度々危機に直面した時に人生のテーマを強く感じ、より深刻な危機に陥っている。③絵画表現することで、「失明の喪失体験」が「失明の獲得体験」となるパラドックス的価値の転換が起こり、発達への転機となっている。④絵画表現によって他者との関係性に変化が起こっている。⑤自他の「死」に直面して視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティは明確になり、発達が促され、努力によって成熟する。⑥一人の人間としてのライフサイクルと芸術家のライフサイクルは二重構造として展開していた。両者の危機が重なり合うとき、絵画表現によって生き抜く可能性が示された。

第3章 本研究の成果と今後の課題

第1節 本研究の成果

本研究の主要な知見は以下の5点である。なお、パラドキシカルな事象については、【 】で示した。

第1に、現実的及び象徴的な「死」への直面化によってアイデンティティは明確化され、極限での「努力」は、【視覚を使用して描く世界】から【視覚を使用しないで描く世界】を絵画表現するパラドックス的な表現

力を生み出す。第2に、失明という受動的な負の体験であっても、【見えないことで他者から庇護を与えられる存在】から【見えないことで他者に喜びや驚きを与えられる存在】となるパラドックス的価値の転換によって社会的価値のある作品を表現する能動的体験となり、社会へと発信することが可能となる。第3に、互いに心理的な影響を与える相互性は、苦しい危機の状況にあっても、他者への信頼感を維持し、アイデンティティの発達を促進する。第4に、生と死の境界にある時、今まで生きてきたアイデンティティや自己存在を問う。自己を生かすためには、【失明によって自己表現としての作品を見るのが不可能】な状況から【失明によって自己表現としての作品を他者のミラーリングによって見るのが可能】となるパラドキシカルな方策で創造性が引き出され、独自性となる。第5に、人生において自分の内的な本質部分の信念を貫き通すことは、アイデンティティの独自性を高め、生き様となる。そして、独自性を維持していくための命の限りの「努力」によってアイデンティティは成熟する。

本研究は、視覚障害のある芸術家の心理的プロセスを縦断的に研究することによって、いかようにして危機を乗り越え、アイデンティティを発達させていくのか、2名の芸術家の発達プロセスのモデルとしてアイデンティティ研究に寄与できたと考える。

第2節 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は、元来比較検討を第1目的として、条件を統制した対象者ではない。従って、2名の芸術家の共通点や相違点の要因を把握することには限界がある。一方、弱視であることや視野障害があることを前提として画家人生をスタートした芸術家は数名存在している。これらの視覚障害のある芸術家の視覚障害と芸術家としてのアイデンティティの関連性について比較検討していくことも今後の課題である。

引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.
- (エリクソン, E. H. 仁科 弥生 (訳) (1977/1980). 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- 小嶋 由香 (2010). 人生半ばで障害を負うこと 岡本祐子 (編著) 成人発達臨床心理学ハンドブック——個と関係性からライフサイクルを見る—— (pp. 289-298) ナカニシヤ出版
- 岡本 祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開——中年期の危機と心の深化—— ミネルヴァ書房
- 岡本 祐子 (編著) (2010). 成人発達臨床心理学ハンドブック——個と関係性からライフサイクルを見る—— ナカニシヤ出版
- 佐藤 郁哉 (2008). 質的データ分析法 ——原理・方法・実践—— 新曜社
- 谷 富夫 (1996). ライフ・ヒストリーとは何か 谷 富夫 (編著) ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために (pp. 3-28) 世界思想社
- 鑓 幹八郎 (2008). 「ミケランジェロのモーセ像」——フロイトの芸術論によりそって—— 鑓 幹八郎 著作集 IV 映像・イメージと心理臨床 (pp. 52-68) ナカニシヤ出版
- 山本 雅美 (1995). 作品とアイデンティティ 鑓 幹八郎・宮下 一博・岡本 祐子 (共編) アイデンティティ研究の展望 III (pp. 52-68) ナカニシヤ出版
- 山本 力 (1997). 喪失の様態と悲哀の仕事 心理臨床学研究, 14, 403-414.
- 山本 力 (2014). 喪失と悲嘆の心理臨床学 誠信書房